

最終講義よりも就任講義を

佐藤教授(大東)が語る文化的転換

日本の大学では春になると「最終講義」の季節が訪れる。退職教授が長年の研究と教育を総括するこの儀式は、日本独自の大学文化として定着してきた。しかし、ヨーロッパ諸国では古くから、退任ではなく「就任」の時点で公開講義を行う慣行が制度として根付いているという。東京大学の佐藤浩章教授はこの文化的差異に疑問を投げかけ、就任講義の制度化こそが、大学を知の展望を語る場として再生させ、社会との信頼を築く文化的転換になるのではないかと説く。

最終講義のシーズンである。メールやSNSでの開催告知が飛び交う中、思い出すのは、昨年、国際会議に参加するためロンドンを訪れた際のことである。筆者は久しぶりに古い友人に会った。彼女はインペリアル・カレッジ・ロンドンに務めており、大学内を案内してくれた。

キャンパスの一角にある荘厳なホールに足を踏み入れたとき、彼女がぼつりと言った。「ここではよく就任講義が開かれるんですよ」

「ここまではよく就任講義が開かれるんですよ」イギリスやドイツをはじめとするヨーロッパ諸国では、近代大学が成立した頃から、教授に昇任する際の「就任講義」が制度として存在する。同僚



教員、学生、家族、そして時に市民までもが参加する大学公式の公開儀式である。講義では、教授がそれまでの研究成果を紹介するだけでなく、今後取り組む研究の構想、教育方針、さらには必要な支援や連携についても率直に語る。これは、学問的な決意表明であると同時に、大学が社会に開かれた知の場であることを象徴する行事でもある。翻って日本ではどうか。教授就任時に記念講演を行う文化は、少なくとも制度としては広く定着していると言いがたい。一方で、日本の大学には「最終講義」という独自の儀式がある。これは定

年退職や退任に際して、長年の研究や教育を総括する場であり、多くの場合、在学生や同僚、教え子が聴講に訪れる。筆者もこれまで数多くの最終講義に参列してきた。ある教授の最終講義では、歩んできた研究の道が年代順に語られ、同僚や家族、学生たちへの深い感謝に満ち溢れていた。後進にとっては、自らの将来モデルと接する機会であり、大学教授職のキャリア教育の場として機能していたように思う。しかし、別の講義では様相がまったく異なっていた。過去の業績を誇示し、大学や社会への批判が続いた。オンラインで参加していたが、嫌気がさして途中退席をさせてもらった。最終講義とは、その人の研究人生の集約点であると同時に、その人格や哲学までもが露呈する場なのだろう。そうした経験を思い出

しながらも、ロンドンの友人のこの一言に、筆者は即答できなかった。「退任時に講演をしたところで、何のリリースも得られないのに、何の意味があるの?」この問いは痛烈である。そして、同時に本質を突いている。

就任講義は、大学教授が新たな環境と役割を得て、経済的・文化的・人的リリースをも拡張される「始まり」のタイミングで開かれる。そこに未来への構想を提示し、必要な支援を呼びかける意義があるのは明白だ。対して、最終講義はすでに退く人の「過去」に焦点を当てる場であり、未来に直結するものとはなりにくい。

もちろん、最終講義を否定するつもりはない。日本の大学文化の中で、それは重要な意味を持ち続けている。しかし、むしろ就任講義こそが制度として確立されるべきではないだろうか。

実際、日本でもいくつかの大学、特に医学部では教授就任に際しての講義を制度化している。これらを一つの慣例として、他学部・他大学に広げていくことは十分に可能だろう。

制度化までは至らずとも、今後教授に就任する人に対して、学科や研究室が就任講義を自主的に企画するという方法も考えられる。こうした取り組みが増えれば、就任講義の文化は自然と根付いていくに違いない。

かくいう私も現任校に着任した際に、100人規模の就任パーティを企画してもらった。当時の本音は、開催されるであろう歓迎パーティに何度も参加するのは体力的にも大変なので、集約できるのであれば望ましいというものだったが、それ以上の効果はあった。かつての教え子、同僚、仕事仲間と久々に再会できたことはもちろん、参加者同士で新たな繋がりができたことは嬉しいことだった。実際、共同研究や共同ビジネス、食事会などがこの間行われてきている。今振り返ると、私は冒頭で挨拶はしたものの、未来を語るには足りない時間数であった。もう少し長めの講義を行い、学術活動の抱負を語

れば、就任講義らしくなったかもしれない。就任講義はその教授個人のためだけのものではない。若手教員にとっては、将来に自分も同じ壇上に立つ可能性を想像し、自らの学術活動と向き合う刺激になる。学生にとっては、教員がどのような理念で教育に臨んでいるのかを知る機会であり、大学という場の意義を再確認する場となるだろう。そして大学にとっても、その教授を迎えるという「覚悟」を内外

に示す場になる。学問とは、知の伝承だけでなく、知の展望という機能もある。だからこそ、「これから何を指すのか」に光を当てるべきなのではないか。

最終講義よりも就任講義を――これは、単なる制度改革の呼びかけではない。大学が今後も知の拠点として社会に信頼され続けるために、そして、学問が未来を語る営みであるためにも、必要な文化的転換の提案である。(文責・佐藤浩章)